

令和紙



おりおりの記

インド、平均値が意味をなさない国

日印協会代表理事・理事長
(元駐印・仏大使)

平林 博

インドは人口で世界第2位、GDP第6位の大国だ。弱点は極端な格差だ。富と貧、善と悪、美と醜、賢と愚など、極端が併存する国、換言すれば、平均値が意味をなさない国だ。

優れた政治家がいる一方、インド国会議員の相当数は犯罪歴がある。賢人や敬虔な信者が少なくないが、あちこちで大小のワルがはびこる。 Bollywood映画ではアリア系の美男美女が踊り歌うが、各地の貧困地帯や少数民族地帯に行けば対照的な人々が生活する。

特に平均値が意味をなさないのは、経済指標だ。1人当たり国民所得など、人口12億3千万人で割った数字は小さな数字になってしまい、インドの国力を見失う。世界の富裕層トップテンなどには財閥の総帥ムケシュ・アンバニや米国グーグルのサンダー・ピチャイCEOなど世界的な経営者たちが名を連ねるが、対極には絶対数で世界一の貧困層がいる。ムケシュ・アンバニが830億円ほどかけて自分と家族のために建てたムンバイの高層マンションには600人の使用人が働いていると言われる。しかし、その眼下にはスラム街がある。

経済格差の根源には、教育格差がある。インドの識字率は、全国平均75%前後だが、南部ケララ州の90%越えから北部ビハール州の60%強まで、地域のばらつきが大きい。今時、小学校にも行けない貧困層の子供も多い。インドの高等教育機関は欧米流の教育と英語を受け継ぎ、国際的に通用

する人材を多く輩出するが、貧困層には高嶺の花だ。最近ではインド各地で拡大しつつあるインド工科大学(IIT)が国際的に高い評価を受けているが、こ



こでは能力主義なのが救いだ。

極端な格差の要因は、カースト制度だ。カーストは出自により5つの階層(ブラーミン、クシャトリア、ヴァイシヤ、シュードラ)の4カーストおよびその下のダリットいわゆるアウトカースト)に分かれる。さらに、職業別に千を超えとも言われるサブカーストに分かれる。紀元前1500年ごろのアリア人のインド進出以来続いている社会的差別だ。独立後インド憲法により違憲とされ、政府は「留保制度」により議員数、公務員数、大学入学者数などを人口に占める各カーストの割合に比例して配分している。しかし、浄・不浄にこだわるヒンドゥー教の教義により、下層カーストを不浄として忌避する宿痼はなくなる。

インドはこれからも大きく成長するであろう。しかし、わが国のように平均値が意味を持つ国になるのは遠い先だと思われる。